

中国の茶畑では今

中国では二〇〇五年頃からプーアール茶ブームが巻き起こり、続いて紅茶ブーム。現在各地方政府は何とか地元の茶葉を全国区にして売り込もうと、『お茶のまちおこし』に懸命である。一方で労働者不足は深刻で、このままでは以前の日本の茶畑のようになる、との懸念が広がっている。そんな状況をレポートしてみたい。

新疆ウイグルに供給されるレンガ茶

(湖南省益陽)

湖南省長沙市からバスで一時間、益陽市は静かな街だった。この街にやって来た理由はただ一つ、新疆ウイグルや内モンゴルなどに大量に供給されている磚茶（通称レンガ茶）の生産地を見るためだった。レンガ茶は運びやすいようにレンガ状に固められた後発酵茶で主に辺境で売られていたことから辺銷茶（辺茶）とも呼ばれている。

実は最近新疆ウイグル自治区に三度ほど足を運んでおり、その度に目にしたレンガ

茶の価格が非常に安かったこと及びウイグル人が日に何杯もお茶を飲んでいるのを見て気になっていた。だがその歴史や何故飲まれているのかなどの経緯は良く分ならず、産地詣りとなった。

益陽のある茶荘で偶然出会った男性に聞いたところ、それらの疑問がほぼ水解決した。価格が安い理由は「政府による少数民族支援」であり、生産者に補助金が出ている。ウイグル人やモンゴル人がレンガ茶を飲むのは「ビタミン補給と羊など肉類の消化促進」だという。実際ウイグル人に聞いても、「毎日このお茶を飲まないといられない」と言っているのは単なる習慣だけではない。

説明してくれた男性があまりに詳しいので仕事を尋ねると、何と「益陽市茶葉局長」と名乗られた。益陽は茶業を支柱産業としており、スリランカ政府の紅茶局のように専門の役所まであったのだ。局長によれば「二〇一〇年の上海万博で大きなブースを

須賀 努



湖南省安化の茶工場で働く若者（2013年 筆者撮影）

出し、安化黒茶のブランドで大いに宣伝、最近需要が増えている」という。省政府、市政府主導で茶葉を売り込み、これまで辺境中心だった消費を全国レベルに引き上げ



福建省安溪 伝統製法で鉄観音茶を作る (2013年 筆者撮影)

ると同時に、出稼ぎに行く若者の地元での雇用を確保する狙いがある。実際に広東省に出稼ぎに行っていた若者が茶工場、茶荘で働く姿が見られ、沿岸部で人集めが難しくなっている原因の一つが見られた。

華僑向けに輸出する六堡茶の故郷

(広西壮族自治区梧州)

香港からバスに乗り、深圳の国境を越え、広東省を西の端まで行き、省を跨ぐとそこに広西壮族自治区梧州という街がある。田舎町との印象だったが、周囲は不動産開発が盛んに行われており、ちょっと違和感があった。高速鉄道、広州―南寧線の駅が近々出来るとのことで納得。

その梧州で今開発と並んで力が入っているのが、地元で採れる六堡茶という名の後発酵茶のブランド化。元々この六堡茶は高温多湿地域で飲むと体に良いとされ、マレーシアや香港の華僑が愛飲したお茶。中国国内では殆ど飲まれることなく、作られた茶葉はほぼ輸出用。日本にもこの独特の黒茶を好む人々があり、輸出されているとか。因みに富山県では六堡茶と同様の製法で作られているバタバ茶という茶もあるという。

梧州市内は小さな街だが、六堡茶を中心に売る茶荘が街のあちこちに見られ、市内中心部には梧州茶廠という国有茶工場があり、六十年の歴史を誇っている。ただ現時点では益陽とは異なり、市政府が六堡茶を全面的に支援をしているようには見えない。梧州茶廠も伝統的な経営方針で、益陽茶廠のように株式制に移行し、生産性を上げていく所とは異なっている。やはり不動産開発の方が儲かるのだろうか。

人手不足で伝統製法の鉄観音茶がなくなる (福建省安溪)

鉄観音茶と言えば、日本人にも知られている、中国茶の代表銘柄の一つ。その産地は福建省のアモイから内陸へ一時間半ほど入った安溪にある。近年鉄観音の茶葉が鮮やかな緑になり、緑茶に近くなるという変化が起っていたことから、その現場を見に行った。

筆者が訪ねたのは大坪という村の張さん。鉄観音の伝統製法を守るほぼ唯一の人と地元で言われていた。伝統製法では茶葉を摘んでからほぼ丸二日、寝ずに製茶に励む。実に厳しい作業であるが、最近では機械で茶葉を摘み、出来るだけ手を掛けずにとっと早く作り、早く売ることが横行しているという。茶葉が緑色になっているのは実は「手抜き」とも言われている。いかにも最近の中国的な手法だ。

その原因の一つは人手不足。仕事がいよいよ上、季節労働で安定しない茶業より、最近では周辺都市に出来ている工場で働いた方が楽に給料がもらえるので、若者は村を離れていく。茶摘みを機械で行い、加工にも時間が掛けられなくなる。

そして茶葉の品質が維持できなくなると、価格も下がる。すると収入が下がるのを防ぐため、更に生産量を増やすという悪循環に陥っていると言える。村には若者は殆どおらず、茶農家の嫁までもが収入低下によって、出稼ぎに出ていくケースすらあった。

「今村に残っている働き手は普通話が上手く話せない者だけさ」との言葉が非常に印象的だった。

伝統製法で作る張さんもすでに六十五歳。近々引退することを考えている。もうあの濃い目の香り高い鉄観音茶を飲むことが出来なくなる日もそう遠くはない。

(コラムニスト)